慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ブノアメシャン著 牟田口義郎訳『アラビアの王 ファイサル』
Sub Title	Jacques Benois-Méchin "Fayçal roi d'Arabie L'homme, le souverain, sa place dans le monde. (1906-1975)"
Author	富田, 広士(Tomita, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1977
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.50, No.6 (1977. 6) ,p.76- 81
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19770615-0076

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Jacques Benois-Méchin,

Fayçal, roi d'Arabie;

L'homme, le souverain, sa place dans le monde. (1906–1975)

Éditions Albin Michel, 1975.

ブノアメシャン　著

牟田口義郎　訳

『アラビアの王　ファイサル』

(一)

本書は、フランスの著名な伝記作家、ブノアメシャンによつて書かれた、サウジアラビア故ファイサル王の伝記である。周知のように、ブノアメシャンは、すでにサウジアラビアを中心とした中近東現代史に関する二つの著作、即ち『砂漠の豹　イブン・サウド』（邦訳名、一九五五年）及び『オリエントの嵐』（邦訳名、一九六〇年）を発表している。それらと本書とを比較してみると、著者の分析視角には一貫して幾つかの大きな特徴があるように思われる。第一に、現代史の流れを追う中で、著者は史実の実証的裏付けを重視していることである。第二には、著者の歴史を見る眼は、常に中近東地域内部から生ずる政治的要求の生成発展に向けられていることである。換言すれば、域外の大国の役割を否定する訳ではないが、それよりはむしろ域内の問題の動きを追うことに中心が置かれている。第三に、二番目に掲げたことと関連するが、ポリティカル・アクターの伝記を書く著者の手法は、単なる人物論ではなく、アクターが置かれた歴史的背景やアクターの実際の政治行動の分析を通して、その歴史的・政治的役割を明らかにすることである。

従つて、本書は、確かにファイサルの生涯を伝記的に扱つてはいるけれども、それは、ファイサル王の歴史的・政治的役割を、中近東現代史のパースペクティブの中で、実証的に研究した書であるといい得るのである。

次に、本書の章立てを示しておこう。

第一章　ファイサル誕生からイブン・サウドの死まで（一九〇六―一九五三）
第二章　過渡期のサウド王（一九五三―一九六四）
第三章　ファイサルのアラビア（一九六四―一九七三）
第四章　アラブの「新政策」（一九七三―一九七四）
第五章　ファイサルの死（一九七五・三・二五）
終　章　ファイサルの最後の忠告（一九七五・三・二九）

本書を通読して気がつくことは、その後半部（四、五、終章）は、一九七〇年代、特に第四次中東戦争おいてファイサルが演じた指導的役割を、集中的に分析していることである。

そこで、以下、(二)においてファイサル生誕から一九六〇年代に及ぶ前半部（一、二、三章）を扱い、つづいて(三)においては、後半の部分

を紹介し、最後に㈣において、本書の意義と問題点を、冒頭に掲げた著者の分析視角の特徴に関連して指摘することにする。

㈡

二〇世紀最初の四半世紀のアラビア半島は、ファイサルの父、イブン・サウドによる半島統一運動によつて特徴づけられる。

一九一〇年代当時、アラビア半島は対立する二大国イギリスとトルコの渇望の的になつていた。一九一四年、第一次世界大戦直前に、イギリスとトルコは半島を二つに分割する秘密協定を結んだが、大戦勃発によつてその実施を阻まれた。戦後イギリスは逆にサウド家を援助する姿勢を強めたのである。一九一九年、イギリス政府の訪英招請を受けたイブン・サウドは、ファイサルを派遣した。そこで行なわれた英・サウジ間の交渉そのものは失敗したが、年少にしてファイサルが対列強交渉に当たつたことは注目に値するのである。一九二一年、ファイサルは父から部族反乱を鎮圧する討伐軍の指揮を任され、二四年半島南部に勢力を有したハシム家を聖地メッカから追放する作戦が成功すると、父に伴つてメッカ入城を果たした。翌年ファイサルはヘジャス地方の副王に任命された。こうしてイブン・サウドの半島統一運動は、一応の成功を見たのである。

その後三十年代にかけて、王国の勢力拡張の努力が続行された。一九三四年イエメン北部のアシール全土を領有したことによつて、それは達成されたのである。この際、ファイサルは第一イフワン軍を指揮した。そして新サウジアラビア王国が成立すると、彼は父によつて外務大臣に任命されたのである。彼は一九二六年から四三年にかけ計十三回もの外国訪問を行なつている。

一九三〇年代当時、サウジアラビアに強い関心を持つた列強は、アメリカであつた。アメリカは半島に石油を発見し、開発し始めたからである。アメリカとサウジアラビアとの間の友好関係は、石油の利権を巡つて深まり、一九四五年に行なわれたルーズベルト＝イブン・サウド会談においてその頂点に達した。しかしパレスチナ問題では意見が対立し、四七年国連がパレスチナ分割案を討議した時に、ファイサルはアラブ諸国の全代表団からスポークスマンに選ばれながら、アメリカが賛成票を投ずるのを食い止めることができなかつたのである。

一九五三年イブン・サウドが死ぬと、長男サウドが王位を継承すると共に、ファイサルは皇太子として外務大臣に留任した。五〇年代及び六〇年代前半当時、域内国際政治の上で注目すべきことは、サウジアラビア・エジプト間の関係が、ナセルの対ソ接近をテコとして次第に冷却していつたことである。一九六二年、イエメンにおいてエジプト軍の支援の下に軍事クーデターが起こると、サウジアラビアは前政権担当者の一派を積極的に支援した。翌年、事態はファイサルがエジプトとの外交関係を断絶するまでに至つたのである。他方、王国内では内政が悪化し、サウド王に対する支配階層の不満が強まつた。その上サウドは外交においても無能ぶりを示したため、六四年支配階層は俗権・教権双方をファイサルに移譲することを決定したのである。

王となつたファイサルに課せられた最初の難題は、こじれた対エジプト関係を処理することであつた。彼は一九六七年、六日戦争後に開かれたアラブ首脳会談において、エジプトに対して運河収入を補塡するための援助を提案した。これによつて、サウジアラビアはイエメンからのエジプト軍撤退を引き出すことができたのである。こうしてサウジアラビア・エジプト間の和解は徐々に始まつた。

と同時にファイサル王は内政面で数多くの問題を抱えていた。それは一言でいえば、国家の近代化をいかにして始動させるかという問題であつた。先ず彼は赤字財政をみごと回復させた。次に行政機構の改革を断行した。ファイサルは「考慮すべきはただ、国民の生活水準を効果的に引上げ、彼らにより一層の安寧と社会正義を授与すべき政府の力量なのだ」といつている。更に、彼は軍の近代化、農業開発、交通・通信網の整備、社会福祉の充実等の面で、着々と実績を上げていつたのである。以上のような近代化政策は、サウジアラビア社会の中に実業家・技術者集団からなる新しい階層を生み出す一方で、伝統主義者からの執拗な反対に直面したのであつた。

また一九六〇年代後半の域内国際政治の上で注目すべきことは、サウジアラビアが、世界最大の産油国として、石油輸出国機構内部においていわゆる「石油戦略」の発動権を掌握しつつあつたことである。それに比例して、ファイサルは世界政治に対する自国の発言力をも強めることができたのである。

(三)

一九七〇年代に入つて、ファイサルは世界政治の上では対米友好関係を、域内国際政治の上では域内指導権の確立を追求した。そしてその双方を両立させようと試みたのである。彼は「父はアラビアにおけるアメリカの代弁者になろうと思つた。わたしはアメリカに対するアラブの代弁人になろうと思う」といつている。

この試みは、ナセル以後のエジプトを利用することによつて着手された。即ち、新大統領サダトに、ソ連離れ・対米接近を示唆したのである。一九七二年七月、この勧告を受け入れたサダトは、ソ連軍事顧問団を追放した。翌七三年十月、サダトは、ファイサルの同意の下に事態に揺さぶりをかけ、アメリカの関心を惹くためにシリアの応援を得て対イスラエル限定戦争を実行したのである。ファイサルは側面からこれを援助するため、石油輸出国機構を通して石油価格の吊上げを実施し、西側世界の経済に揺さぶりをかけた。アメリカは、サウジアラビア、エジプト両国首脳が期待した通り調停に乗り出し、同月キッシンジャー国務長官はイスラエルに圧力をかけ、停戦を受諾させることに成功したのである。加えて、翌七四年二月、アメリカ・エジプト両国は六七年以来断絶していた国交を正常化するに至つた。つまりファイサルは、エジプトをアメリカに接近させることによつて、その親米的傾向が、自らの域内指導権の実現にとつて妨げにならないように図つたのである。その意味で、ファイサルがサダトの対イスラエル限定戦争案に賛成したのは、それがアメリカ・エジプト間の関係改善をもたらすことを見越していたからなのであつた。

しかしこうしたアメリカ・エジプト間の関係強化にもかかわらず、一九七四年八月フォード新政権が誕生すると、米・サウジアラビア関係は一時的に悪化していつた。ファイサルが産油量削減をちらつかせてアメリカの対イスラエル政策の変更を迫ると、アメリカ側はサウジアラビア油田地帯への武力介入の可能性を以て威嚇し、これに応戦したのである。

この間ファイサルは、アラブ主義の擁護を主唱して、域内指導権の確立に大いに努力した。七五年一月彼は先ず一九五八年以来関係が悪かつたシリアに対して、アラブ産油国の戦争当事国に対する救済金の分担額を渡した。そしてシリアの要求を入れて、エジプトがシナイ半島だけに限定された兵力分離交渉を進めないように、サダトに釘を挿したのである。また彼は、パレスチナ解放機構にも接近した。一九七四年十月、第八回アラブ首脳会議において、ヨルダン川西岸地区に対する解放機構の代表権を認めたのである。このように七四年を通して、ファイサルはアラブ主義を統合のための手段とし、アラブ諸国の仲裁者としての立場を固めたのである。と同時に彼は若干悪化し始めた対米関係を改善することをおろそかにしなかつた。一九七五年一月、サウジアラビアのスルタン国防相は米人軍事顧問一千人の雇用契約をアメリカ政府との間に締結したのである。

しかし第四次中東戦争の兵力分離交渉そのものは難行した。というのは、背後でファイサルが兵力引き離しをシナイ半島だけに限定することに同意しなかつたためである。従つて、一九七五年三月、キッシンジャーが国連緊急軍のシナイ半島駐留期限を翌月に控えて調停を再開した時、交渉妥結の望みは薄かつたのである。実際、キッシンジャーがイスラエル軍のシナイ半島、ゴラン高原及びヨルダン川西岸地区からの同時撤退を要求した時、イスラエル政府としては、いかなる譲歩をも是としない国内の強い国民感情を考慮しない訳にはいかなかつた。そこで、キッシンジャーは、イスラエルの安全保障はアメリカの「総括的な利益」によつて保証されていること、そしてそのアメリカの国益はアラブとの一定の友好関係に依存していることを強調した。しかし結局、イスラエル政府はシナイ半島からの撤退だけにしか応じないことを決定したのである。このキッシンジャー調停の失敗によつてサダトが受けた打撃は大きかつた。彼は交渉妥結に自らの政治的地位とエジプト経済の再建を賭けていたからである。

その直後サダトはファイサルと連絡をとり、「平和へのはずみ」をもう一度つけ、キッシンジャー調停工作を続行させることが是非とも必要であることに合意した。ところがその直後ファイサルは暗殺されたのである。しかし同月、サダトはファイサルとの合意に沿つて、(1)国連軍駐留期限の三ケ月間更新、(2)スエズ運河再開、(3)対ソ関係をふさわしい規模の中にもどすこと、(4)ジュネーブ会議招請の要求を発表し、兵力分離交渉を粘り強く続けてゆく姿勢を明らかにしたのである。こうして「平和へのはずみ」はもう一度つけられた。これに力を得てキッシンジャーは、中東調停を再開することになるのである。従つて、ファイサルなき後も、ファイサルの構想に沿つ

てもたらされたアメリカ・エジプト間の関係改善は、存続しているといい得るのである。

㈣

さて、以上に示した紹介の部分を踏まえて、本書の意義と問題点を指摘してみよう。

私は、本書の最大は意義は、ファイサルの卓越した指導力の形成過程を明らかにしたことであると思う。著者はそれをサウジアラビア政治史の展開と結び付けて行なつたのである。前半部においては、父イブン・サウドによるアラビア半島統一運動の中で、ファイサルの指導力そして又渉外能力が次第に認められ、青年期にはすでに王国の外交を任せられたことが明らかにされる。そして父によつて採用された親米政策が、死後ファイサルへ継承されてゆく様子が描かれ、更にファイサルが王位に就いてからの近代化政策の成功と中近東地域内における指導権掌握の努力が明らかにされている。

後半部においては、一九七〇年代の中近東政治の中でのファイサルの役割が分析されている。著者は、ファイサルが親米政策の追求と中近東地域内での指導権の確立とを巧みに両立させたと結論している。この結論へ導くために、著者は次のような証拠を提示する。第一に、一九七三年十月、ファイサルはサダトの対イスラエル限定戦争案に対して、それがアメリカ・エジプト間の関係改善をもたらすことを見越して、賛成したことを挙げている。第二に、第四次中東戦争勃発に伴つてファイサルの主導の下に発動された石油値上げの措置は、アメリカの国内開発優先の新エネルギー政策に矛盾しないように慎重に考慮されていたということである。第三に、一九七五年一月、ファイサルがフォード政権成立以降一時的に悪化した対米関係を、米人軍事顧問の雇い入れによつて改善した事実が指摘されている。

本書のもう一つの意義は、第四次中東戦争とそれにともなういわゆる「石油戦略」の発動の過程の分析において、域内でのアラブ各国間の関係に光が当てられているということである。即ち、「リアド・カイロ枢軸」「リアド・ダマスカス枢軸」、パレスチナ解放機構に対する接近等について、その実現の経緯が解明されているのである。これは私が本稿の冒頭で、著者の分析視角の第二の特徴として掲げた、域内問題の重視の表われであると考えられる。換言すれば、中東戦争の分析の際、アメリカ側からのアプローチと同時に、或いはそれ以上に、中近東側からのアプローチ――域内国際政治の実態――が重視されているのである。

と同時に、私は本書にはファイサルの域内指導力の評価に関して大きな問題点があると思う。後半部における分析は、ファイサルの強力な指導力を強調する余りに、時として読者に、七〇年代の中近東政治があたかもファイサル一人を中心として展開されてきたかのような印象を与える。しかしファイサルの指導権は、本当に著者がいうように、域内で最高のものであつたのだろうか。確かに著者は、ファイサルやサダトにインタビューする機会を持つていたようである。にもかかわらず、ファイサルの指導力が域内随一であつたとい

う点に関しては、著者の実証的裏付けは不十分である。例えば、ナセル死後ファイサルは新しく大統領に就任したサダトに対して、従来のソ連寄り路線の修正を「ごく内々の方法で」呼びかけたというが、具体的にどの時点でそれはなされたのであろうか。又ファイサルがサダトの対イスラエル限定戦争案に同意を与えたということは後半部の結論――ファイサルが親米政策の追求と域内指導権の確立を両立させたこと――を導き出す上で、一つの重要な結び目となつているが、このことについても、それが非常に重要なポイントであるだけに、著者はもう少し実証的であつてほしいと思う。

本書全体を通してみて、前半部ではファイサルの域内指導権掌握の努力の道程が実証的に示されているのに対して、後半部ではファイサルは、終始一貫して域内最高の指導権を備えた人物として描かれている。なぜファイサルの域内指導権が、七〇年代に入つて急に最高のものへ飛躍し得たのか、明らかにされていないのである。中近東政治におけるファイサルの役割の評価は、サウジアラビアの国力の成長過程にもつと関連させた形でなされるべきではないだろうか。その意味で、七〇年代のサウジアラビアについても、前半部と同様に、その国力の総合的評価が望まれるのである。

（筑摩書房、一五〇〇円、二九六頁、一九七六年発行）

富田広士